

# 行き過ぎた幼児教育 (二)

目白幼稚園 和田 實

幼児教育の大切なこゝは、今更、述べ立てる必要もありませんが、然りて、幼児教育さへ全力を盡くしさへすれば、凡ての教育は出来上る様に考へて、少年時代、青年時代、を俟つまでもなく、情操教育、理性教育迄も、幼児時代に於て、出来るかの様に考へるこゝの間違つて居る云ふこゝに就いては、去る六月號に少しばかり書いて置きましたこゝは、讀者諸君の記憶せらるゝ所であらう存じます。夫れで、情操教育のこゝは省いて、今少し他の方面に就いて、書いて見たいと思ふのであります。

平素、常に、行つて居る保育の中に於いて、行き過ぎたこゝを行つて居るのは観察遊びであります。保姆に非らざる園長の管理して居る幼稚園、殊に幼児教育の理解なき小學校長に因つて管理される幼稚園の保育を參觀する時、最も此感を深くするこゝが多いのであります。即ち、観察遊びは、遊びに非ずして観察教授となつて居るのであります。観察教授は小學校高學年の仕事で、低學年に於いてさへ、行はぬものであるのに、幼稚園の保育として観察教授をして居るのを、往々にして見受けるのであります。是は明かに、行き過ぎた保育に違ひないのです。見せた以上は夫れに就いて、話すのもよし、教へるのもよいではないか。必ず、覚えさせる、ミ限るのでなければ、重要な諸點を説明してやつても、決して、

悪いことは云へないではないか云ふ人もありますが、そして、又、是が、教育者としての欲ではないか云ふ人もありますが、是が抑も、過ちの元で、短氣や焦燥で、折角の辭ひばを枯らして仕舞ふのを知らないのと同じであります。何事も、時が來なければ熟さぬもので、出來る時が來なければ出來ないものです。出來ないものを出來かさうとするところから、起る無理は必ず何處かに、崇ると思はねばなりません。小學校の高學年で行ふところの博物教授を幼兒に眞似ることの利益は何にしても考へられないことです。是に類したことを世の父兄が、能く旅行先で行つて居るのを見掛けることがあります。子供の爲めさばかりで小さな子供を觀光旅行に連れて歩いて、名所、舊蹟の古事來歴を事細かに説明して居るのを鎌倉あたりで、よく見掛けるものです。是がほんみに、教育愛に燃えて居る親心であります。併し、子供は頓とんと興味がないのですから、馬耳東風で、けろんとして居る始末です。子供こそいゝ迷惑めいわく云はねばなりません。

是に似た行き過ぎ保育が保姆實習生の行ふ數へ方遊びにも屢々見受けることがあります。併し、是は單に保姆實習生ばかりでなく、可なり經驗ある保姆の保育にも往々にして見る所のものであります。斯る人の數へ方遊びは小學校低學年の算術練習さんじゆつと何等選ぶ所のないもので、數へる遊びではなくて、加減乗除の算術練習であります。其練習題の中に三に足す六は幾つ、七足す八は幾つと十一から三を取つたら幾つと二つ宛三つで幾つになるか云ふ様な算術練習題が多分に含まれて居つて、單なる數へ方遊びかずへりあそびは、全く異なるものが多いのであります。そして、肝心な數へる云ふことは碌ろくに行らずに終る云ふ保育振りが相當多いものであります。是も、明かな行過ぎ保育で、子供には何等の興味もないものです。従つて、何處の幼稚園でも、子供が數へ方を嫌つて困る云ふことを聞く所以であります。斯る算術練習は小學校の子供でさへ、中々、困難なものですものを、況して、幼稚園の子どもの好く答はありません。併し、數へ方遊びは少し心的發達の出來て來た子供には、頗る面白いことなので、よい遊びの一種で、悦んで子供のすることでありませう。唯、一步を踏

み越すこゝに因つて、行き過ぎたものなるのであります。注意しなければなりません。

次に、最もよく行はるゝ行き過ぎ保育は躾方に於いて見るこゝが出来ます。尤も、此躾け方ミ云ふものは、躾ける人の老若男女の差別に因つて、随分ミ差異のあるもの、又躾けらるゝ子供の男女に因つても、多少の差異のあるものですが、概して、老婦人に因つて、躾けらるゝ場合に於いて、行き過ぎた躾け方が、最も多く行はれるものであります。子供の年に不相當に、人前を氣兼させたり、人の顔色を伺つたり、氣嫌を取る様なこゝを云はせたり、空お世辭を云はせたりして子供の天真を損ふこゝが、頗る多いのであります。之に反して、若人に因つて躾けらるゝ場合には、兎角無躾になり勝で、所謂、野生滿々ミ云ふ場合が多いのであります。此場合、過ぎたるは及ばざるに如かずで、行き過ぎた躾け方は其及ばざるよりも弊害は多いのであります。何ミなれば躾け方ミ云ふものは、子供の自由を束縛し、其天真の活動を抑制するこゝが多いのですから、多くを躾けるこゝは、子供の存分の發展を妨げる結果になるのであります。お婆さん子の三百安い所以であります。此點に於いて、都會の子供は田舎の子供よりも、多くを躾けらるゝだけに、所謂、都雅上品の狀態はあるものゝ、其元氣に於いて、其本性の暢達の點に於いて到底、田舎の子供に及ばぬミ云ふこゝになるのであります。

以上は躾け方の中でも、躾け箇條の多いか少いか、ミ云ふこゝであり、其躾けの形式が簡單か複雑かミ云ふこゝに因る相違を論じたものであります。茲に、今一つ異つた場合があります。夫れは、保育者即ち母親なり幼稚園の先生なりが、幼児に命令又は禁止を命ずる時に、一々其命令箇條に理由を付けるこゝであります。例へば「お池をいたづらしてはいけません」ミ云ふ禁止命令を下す場合に必ず語尾に「お池の水は穢ないから」ミ云ふ理由を附加するこゝであります。斯る例は近來の若い保母は勿論、相當經驗もあり、思慮もある老成の保母でも随分行つて居るこゝです。今二三の例を上げて見るこゝ

「花壇の中に入つてはいけません。土が堅くなるに植木の芽が出ないから」こか「水を飲んではいけません、お腹が痛くなり  
ますよ」こか「驅けてはいけません、怪我をしますよ」こか云ふ風に何等かの理由を附加しなければ氣の濟まぬ先生が  
ありますが、是なきも行き過ぎた幼児教育で、幼児の躰け方云ふものが何う云ふものであるか云ふ其本質を辨へぬ所  
から來る誤りであります。夫れも、保育法を學ばぬ幼児教育を理解しない一般の母親か老人かゞするのなら、仕方がない  
とも、云へますが立派な保姆の修業をした、幼稚園の先生がするのだから、情けなくなりません。多分、斯る先生は學校又  
は養成所に於いて、學んだ幼児の心理や兒童の道德性の發達経路を段階を云ふ問題に關する講義を卒業と共に忘れて  
仕舞つたものでせうが、是では、保姆としての修業は何の爲ぞや云ひたくなる位のものです。

元來、子供云ふもの、殊に、幼児云ふものは判らず奴で、一知半解のものであります。決して、獨立した思慮的行  
動の採り得るものではありません。故に、子供自身にしても、決して、獨立獨行なきしやうとは、決して思はぬもので、  
何事も、親にたより先生に頼よるもので、家にありては親の心を自分の心とし、幼稚園にあつては先生の心を自分の心と  
して何事も「先生是でいゝの?」「母さん是していゝ?」云ふ様にして、人に決斷して貰ひ、指揮して貰つて安心して居る  
ものであります。従つて、從順を素直に云ふのは子供の天性なのであります。から、此時代に於ける教育者の指揮命  
令には必ずしも、理由の附加を必要としないのであります。否教育者の指揮命令は、單に、指揮命令として、其儘に、直  
に、實行に移さるゝこかが必要なのであります。指揮命令の理由は、決して、簡單なものではありません。夫れを數言、半  
句、で示さう云ふこかは無理であります。子供の理性が發達して、理由の説明を求むる場合には別に之を説明すること  
は必要ですが、命令毎に理由の附加なしには實行しない云ふ様な悪い癖を附けては教育上有害であります。是も明に、行  
すぎた保育の仕方、判らず奴を早く判る子供に仕やうとする、氣早な親心からの教育欲のいたす所で、無理のない誤り

ではありませんが、幼児心理を學び自然の發達を重んずる現今の教育者の採る可き方法ではありません。是に就いてよい實例が或る所で持ち上りました。夫れは、私の知人の家の近所での出來事でしたが、或時、二人の子供が飯事遊びをして居て、甲なる子供が「一寸下駄貸してね」云ひながら、乙なる子供の下駄を履いて、飯事ま、ごこの材料ま、ごことしての草を探らふま、ごこして、傍を流れて居る小溝の縁ふち迄行つた所が、足滑らして、甲なる子供が溝の中に落ちて、下駄は勿論、着物も身體も溝泥だらけになつて仕舞つた。之を見た乙なる子供はけたたましい聲を張り上げて泣き出した。而も「誰々さんが溝ま、ごこに落ちたア」「云ふのではなくて」「下駄がよごれたア」「云ふのであつた。云ふこゝで、折から、其處に居合はせた私の知人は、此乙なる子供が普通の子供の様に、友達の小溝に落ちたのを驚かないで、自分の下駄のよごれたのを悲んだ云ふこゝに奇異の感を持ち、段々其乙なる子供の家の様子を觀察して居つたらば、其子供の平素の躰けられ方が、普通でなく、着物でも、帽子でも、靴でも、玩具でも凡べての所有品を少しでも、汚したりこはしたりするこゝ、非常に嚴重に叱こゝ言を云ひ、時には罰したりするこゝがあるので、其乙なる子供は戦々兢兢こゝとして着物や帽子なきを大事にする習慣である云ふこゝでした。

是なきも、明に、躰けの時期こゝも簡條こゝが、子供の心理や發達を無視した、行り方で、度を過ぎた教育の誤りでありまこゝす。是こゝも同じ誤りで、方面の少し違つて居るのを今一つ上げて見ますこゝ。童話、其他の談話の終りに、教訓を附け加へて、子供を早く、判らず屋の境界から、救ひ上げ様こゝするこゝであります。是のよい實例が、此間も、或處で起りました。夫れは、或時、其處の保姆がお伽話をしました。其話は「子供の悦こゝぶ話」の中にある話ですが、秋の山の上で、紅葉が「私達がこんな美しい着物を着て居るのに、向ふの常磐木こゝさんはまだあんなきたない着物着て居る」云こゝ笑つたらば、數日して此風に其きれいな着物を、すつかり吹き落されて、泣き出した云ふ話ですが、其話をした終りに、それだから、皆さんも美しい

着物なご着たがつてはいけない。そんな子供は紅葉さんの様に不仕合になるご諄々くまぐまご教訓を加へたものでした。所が、數日經て、明治節になつた朝のこも、其園兒の子供の家で、母親が新らしい着物を子供に着せようとするご、子供は「紅葉さんの様になるから嫌だいや」と云つて、何うしても着換へない。仕方がなく平常着ふだうぎのまゝで、幼稚園に出したご云ふ事件が起りました。是なごも、明に、行き過ぎた教育を行つたもので、母親の云ふごこきをきけ」と云ふごこも一點張りで行く可き幼児教育の時期に、殊更に思慮的行動を行ふ様、教訓したのが、悪かつたので、幼兒の心理ご道德性の發達段階を無視した行き過ぎた幼児教育の誤りであります。是に類したごこはまだくゞ上げれば幾等もあらうご思ひますが、餘り管々しくなりますから、是位にして置きませう。